

茶番に終わったアルチピエラゴの違法デモ通告

▶はじめに

「歴史は二度繰り返される。最初は悲劇として、二番目は茶番として」と言われます。大々的に喧伝された11月15日のキューバのアルチピエラゴ・グループの「平和的」デモは、その日の最高責任者の海外逃亡によって、茶番劇に終わりました。

▶アルチピエラゴ・グループの背後にアメリカ政府の支持

アルチピエラゴ・グループは、8月半ばにフェイス・ブックで突然姿を現し、9月20日に全国8県で、「暴力反対、体制転換」をスローガンに「平和的」デモを11月20日に行うことを発表しました。しかし、キューバ政府が、11月20日を全国防衛の日と定めたことから、10月8日、デモ実施日を11月15日に変更しました。そして同グループは、キューバ地方行政や司法機関の再三にわたるデモ禁止通告を無視し、アメリカ政府高官の異例の6度にわたる制裁、干渉発言、加えてアメリカ連邦議会の支持決議を背景にデモ実施の強硬姿勢を崩しませんでした。キューバ政府は、ブルーノ・ロドリゲス外相、ディアス＝カネル大統領が、アメリカ政府から支援を受けた体制転換を求める違法デモは、絶対に認められないと非難し、反論しました。

▶アルチピエラゴ・グループ、違法デモ強行を発表、緊迫感高まる

同グループは、11月11日には、8県でのデモの詳細な実施要項を発表し、15日午後3時を期して白装束での街頭での行進、14日夜の鍋たたき、ベランダからの一斉拍手を呼びかけました。同グループは、世界の約120都市で支持者が集会を開催すると発表し、政府と対決し、衝突する機運が一挙に高まりました。

しかし、12日奇妙なことにアルチピエラゴ・グループのリーダーであるジュニア・ガルシアは、14日に一人で白い服に白いバラをもって、ハバナ市のキ・ホーテ公園から23番街通りを海岸通りまでを歩くと発表。しかし15日での一斉デモで先頭に立つことには触れませんでした。15日にデモに参加すれば逮捕は必至で、ジュニア以外には目立ったリーダーもいないので、組織の温存を図ったのかとも思われました。さらに **抗議するジュニアのアパート前の近所の住民**



14日には、ジュニアが居住するアパートの一階の出口に、近所の住民2~30人が集まり、ジュニアの行動を批判したり、歌ったりしました。アパートの屋上から特大のキューバ国旗がジュニア

←自宅の窓から白バラを示すジュニア

の家の一部の窓を覆うようにたらされる一方、ジュニアは、白い服を着て窓から白いバラを外

に出し、政府への抗議の姿勢を示しました。しかし、集まった人々は、出口の外にいただけで、ジュニアとの衝突はありませんでした。

14日アルチピエラゴ・グループは、ハバナ市及び8県で15日の午後および16日の午後8時に一斉の鍋たたきや、ベランダからの拍手を行うよう呼びかけましたが、それらは、まったく行われませんでした(21.11.15 Reuters)。この日ブリンケン米 국무長官は、キューバ政府にデモを許可するよう主張しましたが、ロドリゲス外相は、キューバへの内政干渉と非難しました。

▶違法デモ行われず平穏な一日となる

翌15日、ハバナ市や、他の8県でも、政府は、軍隊と警察隊が動員され所定の位置で待機しましたが、一般の街頭には警官が所々に2名が警戒に立っているだけで、特に町に軍隊が溢れている光景ではありませんでした。また、革命支持の近所の住民が、アルチピエラゴ・グループの活動家の前に集まりましたが、両者の暴力的な衝突は起きませんでした。15日午後3時のデモ開始時刻になってもデモは起こらず、散発的に街頭に白装束で出る人もいましたが、それに賛同して激励を送る人も見られませんでした(21.11.15 Aljazeera)。



早朝から動員された軍隊

以下の写真は、15日午後4時のハバナ旧市街の状況ですが、デモの様子も、警官の異常な取り締まりも見られません。海外の通信社が報道したように、高らかに打ち上げられたデモの通告は、「しぼんで」しまったのでした。キューバ政府に批判的なCNNも「11月15日、抗議はなかった。抗議を許さなかったからか、あるいは彼らも敢えて抗議をしなかったからか。バイデンがいう『失敗国家』は見られなかった。完全に統制された国家であった」と報道したように、デモは見られませんでした。



旧ハバナ市街デルプラード通り



国会議事堂前



国会議事堂前



ハバナ市街を白い服を着て歩くアルチピエラゴ・グループ支持者。

▶仲間も政府も欺く劇作家ジュニアのショー

15日昼間、仲間が、ジュニア・ガルシアの家を訪ねると、義理の母が出て来て、ジュニアは、疲れて熟睡中だとの返事があったと仲間のフェイス・ブックで流されました。しかし、実はこれは劇作家のジュニアが義理の母と仕組んだ芝居で、その後のジュニアの証言では、すでに、15日早朝、スペインへの脱出のため、家を出て、脱出手引き者のハバナの家に隠れていたのです。ジュニアは、17日午後2時イベリア航空で妻のダヤナとマドリードに到着、18日記者会見を行います。饒舌なジュニアの話では、既に12日スペイン大使館にビザを申請しながら、14日には、一人で白バラを持って行進すると発表し、彼によれば「身の危険を感じたので、夕方スペインへの脱出を午後決意し」、15日早朝家を出たのでした。しかし、実際は、ジュニアは、8県で大きなデモが起きるとは思っておらず、政府当局のデモ禁止措

置を引き出し、キューバ政府が表現の自由を認めない非民主的な政府であるとの印象を国際的にマス・メディアを通じて拡散することを主目的としており、12 日以前にスペインへの脱出を決めていたのでしょう。

▶語らないスペインへの脱出方法の真相

16 日ジュニアは、どのようにしてハバナ空港まで行き、無事飛行機に搭乗できたかという知られたくない点は、そのうち明らかにするといつて、語っていません。ジュニアは、14 日の単独行進の発表も、スペインへの脱出もアルチピエラゴ・グループの誰とも相談していないといいます（秘密行動のためには当然でしょう）。リーダーが隠れるというこの体たらくでは、15 日のデモが、実行されなかったのは当然でしょう。



16 日ハバナ空港内のジュニア

しかし、ここにいろいろな疑問が出てきます。ジュニア・ガルシア・アギレーラという名前で飛行機の座席を予約すれば、当然イベリア職員の目を引き行動が漏れるおそれがあります。また破壊活動を起こそうとしたアルチピエラゴ・グループの国外脱出を当局は防ぐため空港のイミグレーションには厳重な通達がいつているはずで、それを潜り抜けるのは至難の業であると思われます。このことを考えれば、ジュニアは別名のパスポートで出国したことが考えられます。また、スペイン大使館での緊急のビザ手続きを行った人物はだれか、どうして、緊急ビザが取得できたか、ここに諜報組織が介入していたことが推察されます。

▶もともとデモの実行の条件はなかった

それでは、実際に、ジュニアが宣伝していたように 8 県で、あるいは世界の 120 カ国で大々的なデモを行う主体的・客観的な条件はあったのでしょうか。ジュニアによれば、アルチピエラゴ・グループは、3 万人余の賛同者を集めており、その半数がキューバに居住しているとのことです (21.11.14 Reuters)。その数字をそのまま信じるとして、キューバには約 15,000 人住んでいることとなります。キューバの選挙有権者数は約 900 万人ですから、支持者は 0.17% となります。逆に見れば、国民の 99.83% は、同グループに賛成していません。この 0.17% が、無法なデモを強行しても体制の転換を図る力となることはできないことを、ジュニアは、知っていたのではないのでしょうか。あるいはその背後で指図している人々は過大に反政府勢力を評価していたのではないのでしょうか。

同グループは 15 日デモを 17 日まで延長すると発表しましたが、実際には、14~17 日にかけて個人的にデモを行った人は、キューバ国内でも 100 人もいなかったのではないのでしょうか。それは、当局の厳戒な取り締まりを恐れてというよりも、支持者が少なかつたためでしょう。鍋たたきや一斉拍手は、当局に気づかれずに行われるにもかか



マドリードでの反政府集会

ならず、実現されなかったことは、この判断を裏付けるものでしょう。世界の120の都市で行われると過大に発表された集会も、一都市平均では100人程度となりますが、発表された写真を見ても、実際には、マドリードで数十人、リスボンで30~40人、チューリッヒで数十人、マイアミで数十人、リオデジャネイロで20数人、サンチャゴ・デ・チーレで20数人、メキシコで数十人、パナマで5人と、全世界で200人程度だったと推計されます。

▶違法デモの目的は何であったか

ジュニアやその背後の人物の目的は、一般の人々を扇動し過激なデモを行い、できればキューバ政府当局の厳しい制圧を誘い出し、写真や動画でキューバ政府を、自由を弾圧する強権・独裁政府と国際世論に訴え、さらにできうればアメリカの人道的介入を引き出すことだったでしょう。あるいは、そうした最良のシナリオが実現しないまでも、当初のデモ通告、キューバ政府によるデモの禁止、アメリカ政府によるデモの支持の表明によって、自らに同調する国際メディアを通じて、国際社会にキューバが表現の自由を認めない人権問題を抱えた国と描き出し、国際的に孤立化を図るものだったでしょう。

▶ジュニアが語る驚くべきキューバ社会

ジュニアの饒舌な主張は、到着した17日映画監督のイアン・パドロンとの1時間余の単独インタビュー、翌18日の1時間余の共同記者会見、新聞記者フアン・マヌエル・カロとの20分間の独占インタビューで、示されています。それらはYouTubeでも見れますが、次のようなものでした。

- キューバの現政権は、独裁政権、どう猛な専制主義政権である。全体主義国家である。
- キューバの現政権は、国民から乖離し、まったく国民の支持を受けていない。
- キューバには、バチスタ政権打倒後まったく民主主義がない。表現の自由、人権が弾圧されている。
- ジェンダーの面でも、キューバの現政権は女性を差別している。女性の反政府活動家のヨアニ・サンチェスを長い間差別している。キューバはマチスモ（男性優位）政権である。
- キューバ政権は、無実の私をユダヤ人のように差別し、弾圧し、ナチスと同じで、ファシズム政権である。
- キューバは、独占資本主義社会であり、国営企業も自営業も労働者を強度に搾取している。世界のどのような資本主義よりひどく搾取している。
- キューバ政権は、一部が特権層を形成し、残りの大多数を支配している。封建的な支配である。
- キューバ革命を支持しているロマン的な左翼の人々がいるが、現実を知らない未熟な幼稚な考えである。キューバ革命を支持する彼らは偽善者である。ベネズエラ、ニカラグア政権を支持する人々も偽善者である。



18日共同記者会見を行うジュニア

- アメリカの輸出禁止措置（エンバーゴ）は、キューバ政府が、自分たちの失敗を隠すために役立っている（筆者注：ジュニアは封鎖＝ブロケオという言葉を使わず、アメリカ政府と同じエンバーゴという言葉を使っており、封鎖に対する批判はない）。エンバーゴといってもキューバ国民が食べている鶏肉はアメリカから輸入しているものであり、4分の3の国民はエンバーゴを批判していない。
- 医療の成果を賞賛するが、新型コロナ対策では頭痛を治す薬もなく、薬も全くなく、酸素もなく、悲惨なものである。
- キューバ政権は、7月11日のデモでは、一人を殺害した。キューバの独裁政権は、チリのピノチェト独裁と同じものである。
- 人々が15日にデモに行かなかったのは、デモに行くと当局にギロチンにかけられることを恐れたからである。
- 海外に派遣されている医師は、悲惨な状況で働かされ、ひどく搾取されている。

このようなジュニアの議論を聞いた、右派の新聞記者カロも、「キューバは、独裁制だとは思っていたが、これほどひどいとは知らなかった」と述懐するほどの、ジュニアの現体制への憎しみに満ちた発言でした。

▶ジュニアの議論を支持する国民はごく少数

このような極端なキューバ政府、体制批判の全面的な批判に、さすがに大多数のキューバ国民は同意しないでしょう。キューバ国民は、2018年の国会議員選挙で、棄権+白票+無効+一部支持(1,447,419人)を加えると3,122,459人、34.98%が何らかの批判票を示しました。逆に65%が現体制を支持しているのは、アメリカや日本の現状を考えると驚くべき数字です。また、ジュニアは、現行憲法を認めないと批判していますが、2019年の憲法改正国民投票においては、棄権+反対+白票+無効=2,482,108人で、26.69%が反対しましたが、73.31%、国民の3分の2が賛成しているのです。そして、当然のことですが、国会議員選挙や国民投票で反対の態度を取った人々でも、上記のようなジュニアの一面的な主張に賛成するキューバ国民はごく少数の人々でしょう。ジュニアにとって、キューバ社会には居場所がないのです。

今、キューバ国民が望んでいることは、外国からの介入がない中で、キューバ人同士で活発な議論をして、経済改革を進め、インフレを抑制し、生産を増大し、市場での供給を増大し、日常生活を改善することであることは、明らかです。この点を考えれば、ジュニアの無法な行動が、この間にキューバ経済に与えたマイナスの影響は、算定されてはいませんが、少なからずの額に上ると思われます。最高責任者であるジュニアの無責任な逃亡により、反政府のWebでも、アルチピエラゴ・グループは、バラバラになったと報じています(21.11.18 Cybercuba)。ジュニアの行動が茶番に終わったのは、当然のことでした。

(2021年11月20日 新藤通弘)